

妾宅

永井荷風

青空文庫

一

どうしても心から満足して世間一般の趨勢に伴^{ともな}つて行くことが出来ないと知ったその日から、彼はとある堀割のほとりなる妾^{しやうたく}宅^{たく}にのみ、一人倦^うみがちな空想の日を送る事が多くなつた。今の世の中には面白い事がなくなつたというばかりならまだしもの事、見たくでもない物の限りを見せつけられるのに堪^たえられなくなつたからである。進んでそれらのものを打壊そうとするよりもむしろ退^{しりぞ}いて隠れるに如^しくはないと思つたからである。何も彼も時世^{かときよじ}時節^{せつ}ならば是非もないというような川柳^{せんりゆう}式^{しき}のあきらめが、遺伝的に彼の精神を訓練^{おくりま}さしていたからである。身過^{みす}ぎ世過^{よす}ぎならば洋服も着よう。生れ落ちてから疊^{かさね}の上に両足を折曲^{おりま}げて育つた揉^{ねじ}れた身体^{からだ}にも、当節の流行とあれば、直立した国の人たちの着る洋服も臆^{おく}面^{めん}なく採用しよう。用があれば停電しがちの電車にも乗ろう。自動車にも乗ろう。園遊会にも行こう。浪花^{なにわ}節^{ぶし}も聞こう。女優^{ぶらんこ}の鞦韆^{きんこ}も下からのぞこう。沙^さ翁^{げき}劇^{げき}も見よう。洋楽入りの長^{なが}唄^{うた}も聞こう。頼まれれば小説^{そこつせんぼん}も書こう。粗悪な紙に誤植だらけの印刷も結構至極と喜ぼう。それに対する粗忽^{そこつせんぼん}千万なジュールナリズムの批評も聞

こう。同業者の誼よじみにあんまり黙もくつていても悪いようなら議論のお相手もしよう。けれども要するに、それはみんな身過ぎ世過ぎである。川竹の憂うれき身をかこつ哥うたざわ沢ざわの糸より細き筆の命いのちげ毛げを渡世とせにする是非なさ……オット大変忘れたり。彼というは堂々たる現代文士の一人、但し人の知らない別号を珍々先生という半可通はんかつうである。かくして先生は現代の生存競争に負けないため、現代の人たちのする事は善悪無差別に一通りは心得ていようと努めた。その代り、そうするには何処か人知れぬ心の隠家かくれがを求めて、時々生命いのちの洗濯せんたくをする必要を感じた。宿やどなしの乞食ひけすでさえも眠るにはなお橋の下を求めるではないか。厭いやな客衆きやくしゆの勤めには傾城けいせいをして引過ぎひけすの情夫まぶを許してやらねばならぬ。先生は現代生活の仮面かめんをなるべく巧たくみに被かぶりおおせるためには、人知れずそれをぬぎ捨てべき楽屋がくやを必要としたのである。昔より大隠たいいんのかくれる町中まちなかの裏通り、堀割に沿う日かげの妾宅は即ちこの目的のために作られた彼が心の安息所であつたのだ。

二

妾宅あがは上かり框かまちの二畳ふたじやうを入れて僅よか四間よまほどしかない古びた借家しゃくやであるが、拭ふ込んだ表

の格子戸こうしどと家内かないの障子しょうじと唐紙からかみとは、今の職人の請負うけおい仕事を嫌い、先頃さきごろまだ吉原よしわらの焼けない時分、廃業する芸者家の古建具ふるたてぐをそのまま買い取ったものである。二階の一間の欄干らんかんだけには日が当るけれど、下座敷したざしきは茶の間も共に、外から這入はいると人の顔さえちよつとは見分かぬほどの薄暗さ。厠かわやへ出る縁先えんさきの小庭に至つては、日の目を見ぬ地面の湿しけ切つていること気味わるいばかりである。しかし先生はこの薄暗く湿しめつた家をば、それがたにかえつてなつかしく、如何にも浮世に遠く失敗した人の隠家らしい心持ちをさせる事を喜んでゐる。石菖せきしょうの水鉢みづはちを置いた櫥子窓れんじまどの下には朱の溜塗ためぬりの鏡台がある。芸者が弘ひろめをする時の手拭の包紙で腰張した壁の上には鬱金うこんの包みを着た三味線が二に挺ちようかけてある。大きな如輪じよりんの長火鉢ながひばちの傍そばにはきまつて猫が寝ている。襖ふすまを越した次の座敷には薄暗い上にも更に薄暗い床の間に、極彩色ごくさいしきの豊国とよくにの女姿が、石州流せきしゅうりゅうの生花いけばなのかげから、過ぎた時代の風俗を見せてゐる。片隅には「命いのち」という字を傘の形のように繋つないだ赤い友禅ゆうぜんの蒲団ふとんをかけた置炬燵おきぐたつ。その後には二枚折の屏風びやうぶに、今は大方故人となつた役者や芸人の改名披露やおさらいの摺物すりものを張つた中に、田之助半四たのすけはんし郎ろうなぞの死絵しにえ二、三枚をも交まぜてある。彼が殊ことごと更に、この薄暗い妾宅めかけをなつかしく思うのは、風鈴ふうりんの音涼ねしき夏の夕ゆふべよりも、虫の音冴ねさゆる夜長よりも、かえつて底冷そこびえのする

曇つた冬の日の、どうやら雪にでもなりそうな暮方近く、この一間の置炬燵に猫を膝にしながら、所在なげに生欠伸をかみしめる時であるのだ。彼は窓外を呼び過ぎる物売りの声と、遠い大通りに轟き渡る車の響と、厠の向うの腐りかけた建仁寺垣を越して、隣りの家から聞え出すはたきの音をば何というわけもなく悲しく聞きなす。お妾はいつでもこの時分には銭湯に行った留守のこと、彼は一人燈火のない座敷の置炬燵に肱枕して、折々は隙漏る寒い川風に身顫いをするのである。珍々先生はこんな処にこうしていじけていずとも、便利な今の世の中にはもつと暖かな、もつと明い賑かな場所がいくらもある事を能く承知している。けれどもそういう明い晴やかな場所へ意気揚々と出しやばるのは、自分なぞが先に立つてやらずとも、成功主義の物欲しい世の中には、そういう処へ出しゃばつて齒の浮くような事をいたがる連中が、あり余つて困るほどある事を思返すと、先生はむしろ薄寒い妾宅の置炬燵にかじりついているのが、涙の出るほど嬉しく淋しく悲しく同時にまた何ともいえぬほど皮肉な得意を感じるのであった。表の河岸通には日暮と共に吹起る空ツ風の音が聞え出すと、妾宅の障子はどれが動くとも知れず、ガタリガタリと妙に気力の抜けた陰気な音を響かす。その度々に寒さはぞくぞく襟元へ浸み入る。勝手の方では、いつも居眠りしている下女が、またしても皿小鉢を破したらしい物音がす

る。炭団たどんはどうやらもう灰になってしまったらしい。先生はこういう時、つくづくこれが先祖代々日本人の送り過越すごして来た日本の家の冬の心持だと感ずるのである。宝井其角たからいきかくの家にもこれと同じような冬の日が幾度いくたびとなく来たのであろう。喜多川歌麿きたがわうたまろの絵筆持つ指先もかかる寒さのために凍こったのであろう。馬琴ばきん北斎ほくさいもこの置炬燵こきりの火の消えかかった果敢はかなさを知っていたであろう。京伝きやうでん一九春いつくしゆん水種彦たねひこを始めとして、魯文默ろぶんもく阿弥あみに至るまで、少くとも日本文化の過去の誇りを残した人々は、皆おのれと同じようなこの日本の家の寒さを知っていたのだ。しかして彼らはこの寒さと薄暗さにも恨むことなく反抗することなく、手錠ていとうをはめられ板木はんぎを取壊とりこわすお上の御成敗ごせいばいを甘受かんじうしていたのだと思うと、時代の思想はいつになっても、昔に代らぬ今の世の中、先生は形ばかり西洋模倣クラブの倶楽部クラブやカフェーの媛炉だんろのほとりに葉巻えんまきをくゆらし、新時代の人々と舶来はく来の火酒ウイスキーを傾かたけつつ、恐れ多くも天下の御政事うんねんを云々うんぬんしたとて何にならう。われわれ日本の芸術家の先天的に定められた運命は、やはりこうした置炬燵こきりの肱枕ほかより外にはないというような心持になるのであった。

人種の發達と共にその国土の底に深くも根ざした思想の濫觴を鑑み、幾時代の遺傳的修養を経たる忍従棄権の悟りに、われ知らず襟を正す折しもあれ。先生は時々かかる暮れがた近く、隣の家から子供のさらう稽古の三味線が、かえって午飯過ぎの真昼より一層賑かに聞え出すのに、眠るともなく覚めるともなく、疲れきった淋しい心をゆすぶらせる。家の中はもう真暗になっているが、戸外にはまだ斜にうつろう冬の夕日が残っているに違いない。ああ、三味線の音色。何という果敢い、消えも入りたき衰れを催させるのであろう。かつてそれほどに、まだ自己を知らなかった得意の時分に、先生は長たらしい小説を書いて、その一節に三味線と西洋音楽の比較論などを試みた事を思返す。世の中には古社寺保存の名目の下に、古社寺の建築を修繕するのではなく、かえってこれを破壊もしくは俗化する山師があるように、邦楽の改良進歩を企てて、かえって邦楽の真生命を殺してしまう熱心家のある事を考え出す。しかし先生はもうそれらをば余儀ない事であると諦めた。こんな事をいつて三味線の議論をする事が、已に三味線のためにはこの上もない侮辱なのである。江戸音曲の江戸音曲たる所以は時勢のために見る影なく踏みにじられて行く所にある。時勢と共に進歩して行く事の出来ない所にある。然も一思いに潔く

殺され滅されてしまうのではなく、新時代の色々な野心家の汚らしい手にいじくり廻されて、散々慰まれ辱しめられた揚句、颯り殺しにされてしまう傷しい運命。それから生ずる無限の哀傷が、即ち江戸音曲の真生命である。少くともそれは二十世紀の今日洋服を着て葉巻を吸いながら聞くわれわれの心に響くべき三味線の眩きである。さればこれを改良するということのも、あるいはこれを撲滅するというのも、いずれにしても滅び行く三味線的身に取つては同じであるといわねばならぬ。珍々先生が帝国劇場において『金毛狐』の如き新曲を聴く事を辞さないのは、つまり灰の中から宝石を捜出すように、新しきもの処々にまだそのまま残されている昔のままの節附を拾出す果敢い楽しさのためである。同時に擬古派の歌舞伎座において、大薩摩を聞く事を喜ぶのは、古きものの中にも知らず知らず浸み込んだ新しい病毒に、遠からず古きもの全体が腐って倒れてしまいそうな、その遣瀨ない無常の真理を悟り得るがためである。思えばかえって不思議にも、今日という今日まで生残った江戸音曲の哀愁をば、先生はあたかも廓を抜け出で、唯一人闇の夜道を跣足のままにかけて行く女のようなだと思っている。たよりの恋人に出逢った処で、末永く添い遂げられるというではない。互に手を取つて南無阿弥陀仏と死ぬばかり。もし駕籠かきの悪者に出逢つたら、庚申塚の藪かげに思うさま弄ばれた揚句、生命あらばまた遠

国くにへ売り飛ばされるにきまつている。追手おつてに捕つかまって元の曲輪くるわへ送り戻されれば、煙管キセルの折檻せつかんに、またしても毎夜の憂きつとめ。死ぬといい消えるというが、この世の中にこの女の望み得べき幸福の絶頂なのである。と思えば先生の耳には本調子も二上にあがりも三下さんさがりも皆この世は夢じや諦めあきらしやんせ諦めしやんせと響くのである。されば隣りで唄うたう歌の文句の「夢とおもひて清心せいしんは。」といい「頼むは弥陀の御お誓ひ、南無阿弥陀仏々々々々々々。」というあたりの節廻しや三味線の手に至つては、江戸音曲中の仏教的思想の音楽的表現が、その芸術的価値においてまさに楽劇『パルシワール』中の例えば「聖金曜日」のモチイブなどにも比較し得べきもののように思われるのであった。

四

諦めるにつけ悟るにつけ、さすがはまだ凡夫ぼんぷの身の悲しさに、珍々先生は昨日きのうと過ぎし青春の夢を思うともなく思い返す。ふとしたことから、こうして困かこつて置くお妾めかけの身の上や、馴初なれそめのむかしを繰返して考える。お妾は無論芸者であつた。仲之町なかのちようで一時いちじは鳴しならた腕。芸には達者な代り、全くの無筆むひつである。稽古本けいこぼんで見馴れた仮名より外には何にも

読めない明盲目である。この社会の人の持つてゐる諸有る迷信と僻見と虚偽と不健康とを一つ残らず遺伝的に譲り受けてゐる。お召の縞柄を論ずるには委しいけれど、電車に乗つて新しい都会を一人歩きする事などは今だに出来ない。つまり明治の新しい女子教育とは全く無関係な女なのである。稽古唄の文句によつて、親の許さぬ色恋は悪い事であると知つていたので、初恋の若旦那とは生木を割く辛い目を見せられても、ただその当座泣いて暮して、そして自暴酒を飲む事を覚えた位のもの、別に天も怨まず人をも怨まず、やがて周囲から強られるがままに、厭な男にも我慢して身をまかした。いやな男への屈従からは忽ち間夫という秘密の快樂を覚えた。多くの人の玩弄物になると同時に、多くの人を弄んで、浮きつ沈みつ定めなき不徳と淫蕩の生涯の、その果がこの河添いの妾宅に余生を送る事になつたのである。深川の湿地に生れて吉原の水に育つたので、顔の色は生れつき浅黒い。一度髪の毛がすっかり抜けた事があるそう。酒を飲み過ぎて血を吐いた事があるそう。それから身体が生れ代つたように丈夫になつて、中音の音声に意気な鍔が出来た。時々頭が痛むといつては顚顚へ即功紙を張つてゐるものの今では滅多に風邪を引くこともない。突然お腹へ差込みが来るなどと大騒ぎをするかと思うと、納豆にお茶漬を三杯もかき込んで平然としてゐる。お参りに出かける外、芝居へも寄席

へも一向^{いっとう}に行きたがらない。朝寝が好きで、髪を直すに時間を惜しまず、男を相手に卑陋^{ろろう}な冗談をいつて夜ふかしをするのが好きであるが、その割には世帯持^{しやたいもち}がよく、借金のいい訳がなかなか巧い^{うまい}。年は二十五、六、この社会の女にしか見られないその浅黒い顔の色の、妙に滑^{すべ}つこく磨き込まれている様子は、丁度多くの人手にかかつて丁寧^{ていねい}に拭き込まれた桐の手あぶりの光沢^{つや}に等しく、いつも重そうな瞼^{まぶた}の下に、夢を見ているようなその眼色^{いろ}には、照りもせず曇りも果てぬ晩春の空のいい知れぬ沈滞^{ちんたい}の味が宿っている——とでもいいたい位に先生は思っているのである。實際今の世の中に、この珍々先生ほど芸者の好きな人、賤業婦の病的美に対して賞讃^{みづか}の声を惜しまない人は恐らくあるまい。彼は何故^{なにゆえ}に賤業婦を愛するかという理由を自ら解釈^{みづか}して、道德的及び芸術的の二条に分った。道德的にはかつて『見果てぬ夢^{みは}』という短篇小説中にも書いた通り、特種の時代とその制度のもとに発生した花柳界全体は、最初から明白^{あからさま}に虚偽を標榜^{うち}しているだけに、その中^{うち}にはかえって虚偽ならざるもののある事を嬉しく思うのであった。つまり正当なる社会の偽善を憎む精神の変調が、幾多の無理な訓練修養の結果によって、かかる不正暗黒の方面に一条の血路を開いて、茲^{こゝ}に僅なる満足を得ようとしたものと見て差^さ支^{しかえ}ない。あるいはまたあまりに枯淡なる典型^{おちい}に陥^{おちい}り過ぎてかえって真情^{まこと}の潤^{うる}いに乏しくなった古来の道德に対

する反感から、わざと悪徳不正を迎えて一時の快哉かいさいを呼ぶものとも見られる。要するに厭世的なるかかる詭弁きべん的精神の傾向は破壊的なロマンチズムの主張から生じた一種の病弊である事は、彼自身もよく承知しているのである。承知していながら、決して改かいしゆ倅んする必要がないと思うほど、この病弊を芸術的に崇拜しているのである。されば賤業婦の美を論ずるには、極端に流れたる近世の芸術観を以てするより外はない。理性にも同情にも訴うるのでなく、唯過敏ただなる感覚をのみ基礎として近世の極端なる芸術を鑑賞し得ない人は、彼からいえば到底縁なき衆生しゆじやうであるのだ。女の嫌いな人に強しいて女の美を説き教える必要はない。酒に害あるはいわずと知れた話である。然しかもその害毒を恐れざる多少の覚悟と勇氣とがあつて、初めて酒の徳を知り得るのである。伝聞きくならく北米合衆国においては亜米利加印甸人アメリカインディアンに対して絶対に火酒ウイスキーを売る事を禁ずるは、印甸人の一度酔ひとたひえたちまば忽ち狂暴なる野獸と変ずるがためである。印甸人の神経は浅酌微酔の文明的訓練なきがためである。修養されたる感覚の快樂を知らざる原始的健全なる某帝国の社会においては、婦人の裸体画を以て直に国民の風俗を壊乱するものと認めた。南阿弗利加アフリカの黒奴こくどけものは獸の如く口を開いて哄笑こうしやうする事を知っているが、声もなく言葉にも出さぬ美しい微笑ほほえみによつて、いうにいわれぬ複雑な内心の感情を表白する術じゆつを知らないそうである。健全なる某

帝国の法律が恋愛と婦人に関する一切の芸術をポルノグラフィイと見なすのも思えば無理もない次第である——議論が思わず岐路へそれた——妾宅の主人たる珍々先生はかくの如くに社会の輿論の極端にも嚴格枯淡偏狭単一なるに反して、これはまた極端に、凡そ売色という一切の行動には何ともいえない悲壯の神秘が潜んでいると断言しているのである。冬の闇夜に悪病を負う辻君が人を呼ぶ声の傷しさは、直ちにこれ、罪障深き人類の止みがたき真正の嘆きではあるまいか。仏蘭西の詩人 Marcel 《マルセル》 Schwob 《シュオツブ》はわれわれが悲しみの淵に沈んでいる瞬間にのみ、唯の一夜、唯の一度われわれの目の前に現われて来るという辻君。二度巡り会おうとしても最う会う事の出来ないという神秘なる辻君の事を書いた。「あの女たちはいつまでもわれわれの傍にいますものではない。あまりに悲しい身の上の恥かしく、長く留まっているに堪えられないからである。あの女たちはわれわれが涙に暮れているのを見ればこそ、面と向ってわれわれの顔を見上げる勇氣があるのだ。われわれはあの女たちを哀れと思う時にのみ、彼女たちを了解し得るのだ。」といっている。近松の心中物を見ても分るではないか。傾城の誠が金で面を張る圧制な大尽に解釈されようはずはない。変る夜ごとの枕に泣く売春婦の誠の心の悲しみは、親の慈悲妻の情を仇にしたその罪の恐しさに泣く放蕩児の身の上になって、初め

て知り得るのである。「傾城に誠あるほど買ひもせず」と川柳子も己に名句を吐いてい
る。珍々先生は生れ付きの旋毛曲り、親に見放され、学校は追出され、その後は白浪
物の主人公のような心持になつてとにかくに強いもの、えばるものが大嫌いであつたか
ら、自然と巧ずして若い時分から売春婦には惚れられがちであつた。しかしこういう業つ
くばりの男の事故、芸者が好きだといつても、当時新橋第一流の名花と世に持囃さ
れる名古屋種の美人なぞに目をくれるのではない。深川の堀割の夜深、石置場のかげから
這出す辻君にも等しい彼の水転の身の浅間しさを愛するのである。悪病をつつむ腐りし
肉の上に、爛れたその心の悲しみを休ませるのである。されば河添いの妾宅にいる先生の
お妾も要するに世間並の眼を以て見れば、少しばかり甲羅を経たるこの種類の安物たるに
過ぎないのである。

五

隣りの稽古唄はまだ止まぬ。お妾は大分化粧に念が入っていると見えてまだ帰らない。
先生は昔の事を考えながら、夕飯時の空腹をまぎらすためか、火の消えかかった置

炬燵たつに頬杖ほおづえをつき口から出まかせに、

変り行く末の世ながら「いにしへ」を、「いま」に忍ぶの恋草こいぐさや、誰れに摘めとか繰返し、うたふ隣のけいこ唄、宵はまちそして恨みて暁と、聞く身につらきいもがりは、同じ待つ間の置炬燵、川風寒き櫺子窓れんじまど、急ぐ足音ききつけて、かけた蒲団の格こ子外うしそと、もしやそれかとのぞいて見れば、河岸かしの夕日にしよんぼりと、枯れた柳の影ばかり。

まだ帰つて来ぬ。先生はもう一ツ、胸にあまる日頃の思いをおなじ置炬燵にことよせて、春しゅん水すいが手錠はめられ海老蔵えびぞうは、お江戸かまひの「むかし」なら、わしも定めし島流しすずり、硯すずりの海の波風に、命の筆の水馴竿みなれざお、折れてたよりも荒磯の、道理引つ込む無理の世は、今もむかしの夢のあと、たづねて見やれ思ひ寝の、手枕たまくら寒し置炬燵。

とやらかした。小走りの下駄げたの音。がらりと今度こそ格子が明あいた。お妾は抜衣紋ぬきえもんにした襟えり頸くびばかり驚くほど真白に塗りたて、浅黒い顔をば拭き込んだ煤竹すすだけのようにひからせ、銀杏返しの両鬢りようびんへ毛筋棒けすじを挿込んだままで、直ぐと長火鉢ながひばちの向うに据えた朱の溜塗ためぬりの鏡台の前に坐った。カチリと電燈を捻ねじる響と共に、黄きいろい光が唐紙からかみの隙間にさす。先生はそのそ置炬燵から次の間へ這出はいだして有合ありあう長煙管ながギセルで二、三服煙草ぷくを吸い

つつ、余念もなくお妾の化粧する様子を眺めた。先生は女が髪を直す時の千姿万態をば、
 そのあらゆる場合を通じてことごと尽くこれを秩序的に諳そらんじながら、なお飽きないほどの熱心なる
 観察者である。まず、忍び逢いの小座敷には、刎返はねかえした重い夜具へ背をよせかけるよう
 に、そして立膝たてひざした長襦袢ながじゆばんの膝の上か、あるいはまた船底ふなぞこまくら枕の横腹に懷中鏡を立
 掛けて、かかる場合に用意する黄楊つげの小櫛おくしを取つて先ず二、三度、枕のとがなる鬢びんの後おくれ
 毛を搔げき上げた後は、捻ねじるように前身ぜんしんをそらして、櫛の背を齒くわに銜え、両手を高く、
 長襦袢の袖口そでぐちはこの時下へと滑つてその二の腕の奥にもし入黒子いれぼくろあらば見えもやする
 と思われするまで、両肱りようひじを菱ひしの字なりに張出して後の髻うしろたばを直し、さてまた最後には宛さなら
 糸瓜へちまの取手でも摘つまむがように、二本の指先で前髪たばめの束ね目を軽く持ち上げ、片手の櫛で前
 髪はのふくらみを生際はえぎわの下から上へと迅速に搔かき上げる。髻留たばどめの一、二本はいつも口に
 銜はえているものの、女はこの長々しい熱心な手芸あいだの間、黙もくつてぼんやり男を退屈つちさして置
 くものでは決してない。またの逢瀬おうせの約束やら、これから外の座敷へ行く辛さやら、とに
 かく寸鉄すんてつ人を殺すべき片言隻語へんげんせきごは、かえつて自在に有力に、この忙しい手芸さしきの間に乱
 発されやすいのである。先生は芝居の棧敷さしきにいる最中といえども、女が折々思出したよう
 に顔を斜めに浮かして、丁度仏画の人物の如く綺麗にそろえた指の平ひらで絶えず鬢びんの形を氣

にする有様をも見逃さない。さればいよいよ湯上りの両肌脱ぎ、家が潰れようが地面が裂けようが、われ関せず焉という有様、身も魂も打込んで鏡に向う姿に至つては、先生は全くこれこそ、日本の女の最も女らしい形容を示す時であると思うのである。幾世紀の洗練を経たる Alexandrine 《アレキサンドリン》 十二音の詩句を以て、自在にミュッセをして巴里娘の踊の裾を歌わしめよ。われにはまた来歴ある一中節の『黒髪』がある。黄楊の小櫛という単語さえもがわれわれの情緒を動かすにどれだけ強い力があるか。其処へ行くと哀れや、色さまさまのリボン美しといえども、ダイヤモンド入りのハイカラ櫛立派なりといえども、それらの物の形と物の色よりして、新時代の女子の生活が芸術的幻想を誘起し得るまでには、まだまだ多くの年月を経た後でなければならぬ。新時代の芸術の力をもつともつと沢山に借りた揚句の果でなければならぬ。然るに己に完成しおわつた江戸芸術によつて、溢るるまでその内容の生命を豊富にされたかかる下町の女の立居振舞いには、敢て化粧の時の姿に限らない。春雨の格子戸に浚蛇の目開きかける様子といい、長火鉢の向うに長煙管取り上げる手付きといい、物思う夕まぐれ襟に埋める頤といい、さては唯風に吹かれる髪の毛の一筋、そら解けの帯の端にさえ、いうばかりなき風情が生ずる。「ふぜい」とは何ぞ。芸術的洗練を経たる空想家の心にのみ味わるべき、言語

にいい現し得ぬ複雑豊富なる美感の満足ではないか。しかもそれは軽く淡く快き半音下つた mineur 《ミノウル》の調子のものである。珍々先生は芸者上りのお妾の夕化粧をば、

つまり生きて物いう浮世絵と見て楽しんでるのである。明治の女子教育と関係なき賤業婦の淫靡なる生活によつて、爛熟した過去の文明の遠い呟きを聞こうとしているのである。この僅かなる慰安が珍々先生をして、洋服を着ないでもすむ半日を、唯うつうつとこの妾宅に送らせる理由である。已に「妾宅」というこの文字が、もう何となく廃滅の氣味を帯びさせる上に、もしこれを雑誌などに出したなら、定めし文芸即惡徳と思込んでいる老人たちが例の物議を起す事であらうと思うと、なお更に先生は嬉しくて堪らないのである。

六

お妾のお化粧がすむ頃には、丁度下女がお釜の火を引いて、膳立の準備をはじめ。この妾宅には珍々先生一流の趣味によつて、食事の折には一切、新時代の料理屋または小待合の座敷を聯想させるような、上等ならば紫檀、安ものならばニス塗の食卓を用いる事を許さないの、長火鉢の向うへ持出されるのは、古びて剥げてはいれど、やや大形

の猫足ねこあしの塗膳であつた。先生は最初感情の動くがままに小説を書いて出版するや否や、忽ち内務省からは風俗壊乱、発売禁止、本屋からは損害賠償の手詰てづめの談判、さて文壇からは引続き歡樂に哀傷に、放蕩に追憶と、身に引受けた看板の瑕きずに等しき悪名あくみょうが、今もつけの幸さいわいに、高等遊民不良少年をお顧客の文芸雑誌で飯を喰う売文の奴やつことまで成り下つてしまつたが、さすがに筋目正しい血筋の昔を忘れぬためか、あるいはまた、あらゆる芸術の放胆自由の限りを欲する中なかにも、自然と備る貴族的なる形の端麗、古典的な線明晰を望む先生一流の芸術的主張が、知らず知らず些細ささいなる常住じやうじゆうざう臥がの間に現われるためであらうか。（そは作者の知る処あちに非ず。）とにかく珍々先生は食事の膳につく前には必ず衣紋えもんを正し角帯かくおびのゆるみを締直しめなおし、縁側えんがわに出て手を清めてから、折々窮屈きうくつそうに膝を崩す事はあつても、決して胡坐あぐらをかいいたり毛脛けずねを出したりする事はない。食事の時、フランス人フランスじんが極めて *Serviette* 《セルヴィエツト》を頤おとがいの下から涎よだれかけ掛かけのように広げて掛けると同じく、先生は必ず三ツ折みおりにした懷中の手拭を膝の上に置き、お妾がお酌する盃さかずきを一嘗めしつつ徐に膳の上を眺める。

小な汚ちいさなしい桶おけのままに海鼠腸このわたが載っている。小皿の上に三片ばかり赤味がかつた松脂まつやに見たようなもののあるのは、である。千住せんじゆの名産寒鰯かんぶなの雀焼に川海老かわえびの串焼くしやきと今戸

名物の甘い甘い柚味ゆずみそ膾は、お茶漬ちやづけの時お妾だいらこうぶつが大好物のなくてはならぬ品物である。先生は汚らしい桶ふたの蓋を静に取つて、下痢げりした人糞のような色を呈した海鼠なまこの腸はらわたをば、杉すぎ箸しの先ですくい上げると長く糸のようにつながつて、なかなか切れないのを、氣長に幾いく度たびとなくすくつては落し、落してはまたすくい上げて、丁度好加減いいかげんの長さになるのを待つて、傍かたわらの小皿に移し、再び丁寧ていねいに蓋をした後、やや暫くの間は口をも付けずに唯恍惚ただとして荒海の磯臭かおい薰かおりをのみかいでいた。先生は海鼠腸このわたのこの匂におとい色といまたその汚すべしい桶かといい、凡すべて何らの修飾をも調理をも出来得るかぎりの人為的技巧を加味せざる（少くとも表示せざる）天然野生の粗暴しつこきが陶器漆器などの食器に盛もらわれている料理の真中に出しやばつて、茲ここに何ともいえない大胆な意外な不調和を見せている処に、いわゆる雅致とやえと称とる極めてパラドックスな美感の満足を感じて止まなかったからである。由来この種の雅致は或一派の愛国主義者をして断言せしむれば、日本人独特固有の趣味とまで解釈されている位で、室内装飾の一例を以てしても、床柱とこばしらには必ず皮のついたままの天然木んぼくを用いたり花を活いけるに切り放した青竹の筒つつを以てするなどは、なるほどRococo《ロココ》式にもEmpire《アンピール》式にもないようである。しかしこの議論はいつも或る条件をつけて或程度に押留おしとどめて置かなければならぬ。あんまりお調子づいて、こ

の論法一点張りで東西文明の比較論を進めて行くと、些細な特種の実例を上げる必要なく
いわゆる Maison 《メイン》 de 《ド》 Papier 《パピエー》（紙の家）に住んで畳の上に
夏は昆虫類と同棲する日本の生活全体が、何よりの雅致になってしまふからである。珍々
先生はこんな事を考えるのでもなく考えながら、多年の食道楽のために病的過敏となつ
た舌の先で、苦味にがいとも辛いからいとも酸すっぱいとも、到底一言ではいい現し方のないこの奇妙な
食物の味あじわいを吟味して楽しむにつけ、国の東西時の古今を論ぜず文明の極致に沈ちんめん湎した人
間は、是非にもこういう食物を愛好するようになってしまわなければならぬ。芸術は遂に
国家と相容れざるに至つて初めて尊たつとく、食物は衛生と背はいれい戻するに及んで真の味あじわいを生ずる
のだ。けれども其処まで進むうというには、妻あり子あり金あり位ある普通人には到底薄
気味わるくて出来るものではない。そこで自然と、物には専門家と素人しろうとの差別が生ずる
のだと、珍々先生は自己の廢趣味に絶対の芸術的価値と威信とを附与して、聊いささか得意の
感をなし、荒すさみきつた生涯の、せめてもの慰藉なぐさめにしようと試みるのであったが、しかし
何となくその身の行末そらおそろ空恐こしく、ああ人間もこうなつてはもうおしまいだ。滋養に富
んだ牛肉とお行儀のいい鯛の塩焼を美味のかぎりと思つてゐる健全な朴ぼく訥とつな無邪気な人
たちは幸福だ。自分も最もう一度そういう程度まで立戻る事が出来たとしたら、どんなに万

々歳な^めお目^で出度^たかりける次第^{しだい}であろう……。惆^{ちゆう}悵^{ちやう}として^{さかずき}盃^{さかずき}を傾^{かたむ}くる事^{こと}二度^{ふたたび}び三度^{みたび}び。
 唯^と見^みればお妾^{めかけ}は新しい手拭^{てふき}をば撫^な付^つけたばかりの髪^{かみ}の上^{うへ}にかけ、下女^{げによう}まかせにはして置^おけ
 ない白^{しろ}魚^{うお}か何^{なん}かの料理^{りょうり}を拵^{こしら}えるため台所^{だいしよ}の板^{いた}の間に膝^{ひざ}をついて頻^{しきり}に七輪^{しちりん}の下^{した}をば洗^しう
 団扇^{うちわ}であおいでいる。

七

何^{なん}たる物^{もの}哀^{あは}れな美^{うつく}しい姿^{すがた}であろう。夕化粧^{ゆふけいざう}の襟足^{きんそく}際^{きわ}立^たつ手拭^{てふき}の冠^{かぶ}り方^{かた}、襟付^{きんぷけ}の小袖^{こそで}、肩^{かた}
 から滑^{なめ}り落^おちそうなお召^{めし}の半纏^{はんてん}、お召^{めし}の前掛^{まへかけ}、しどけなく引掛^{ひっかけ}に結^{むす}んだ昼夜^{ちゆうや}帯^{おび}、凡^{なん}
 て現代^{こんだい}の道徳^{だうとく}家^けをしては覺^{おぼ}えず眉^{まゆ}を蹙^{ひそ}めしめ、警察^{けいさつ}官^{くわん}をしては坐^そに嫌疑^{まなこ}の眼^{まなこ}を鋭^{えい}くさせる
 ような国貞^{くにさだ}振^ふりの年増^{としまさ}盛^{さか}りが、まめまめしく台所^{だいしよ}に働^{はたら}いてゐる姿^{すがた}は勝手口^{かたてぐち}の破^{やぶ}れた水^{みづ}
 障子^{しやうし}、引窓^{ひんそう}の綱^{しちりん}、七輪^{しちりん}、水瓶^{みずがめ}、竈^{かまど}、その傍^{そば}の煤^{すす}けた柱^{はしら}に貼^はつた荒神^{こうじん}様^{さま}のお札^{ふだ}など、
 一体^{いったい}に汚^{よご}らしく乱雑^{らんざつ}に見える周囲^{しうい}の道具^{どうぐ}立^たと相俟^{あいま}つて、草双紙^{くさそうし}に見^みるような何^{なん}という
 果敢^{はかな}い佗住^{わびずまい}居^いの情調^{じやうてう}、また哥沢^{うたざわ}の節廻^{ふしまわ}しに唄^{うた}い古^{ふる}されたような、何^{なん}という三絃^{さんげん}的情調^{じやうてう}
 を示^しすのであろう。先生^{せんせい}はお妾^{めかけ}が食事^{しょくじ}の仕度^{しど}をしてくれる時^{とき}のみではない。長火鉢^{ちやうかひ}の傍^{そば}に

しよんぼりと坐つて汚れた壁の上にその影を映させつつ、物静に男の着物を縫っている時、あるいはまた夜の寢床に先ず男を寝かした後、その身は静に男の羽織着物を疊んで角帯をその上に載せ、枕頭の煙草盆の火をしらべ、行燈の燈心を少しく引込め、引廻した屏風の端を引直してから、初めて片膝を蒲団の上に載せるように枕頭に坐つて、先ず一服した後の煙管を男に出してやる——そういう時々先生はお妾に対して口には出さない無限の哀傷と無限の感謝を覚えるのである。無限の哀傷は恐ろしい専制時代の女子教育の感化が遺伝的に下町の無教育な女の身に伝っている事を知るがためである。無限の感謝は新時代の企てた女子教育の効果が、専制時代のそれに比して、徳育的にも智育的にも実用的にも審美的にも一つとして見るべきものがない実例となし得るがためである。無筆のお妾は瓦斯ストーヴも、エプロンも、西洋綴の料理案内という書物も、凡て下手の道具立なくて、巧に甘いものを作る。それと共に四季折々の時候に従つて俳諧的詩趣を覚えさせる野菜魚介の撰択に通曉している。それにもかかわらず私はもともと賤しい家業をした身体ですからと、万事に謙讓であつて、いかほど家庭をよく修め男に満足と幸福を与えたからとて、露ほどもそれを己れの功としてこれ見よがしに誇る心がない。今時の女学校出身の誰々さんのように、夫の留守に新聞雑誌記者の訪問をこれ幸い、有難からぬ

御面相の写真まで取出して「わらわの家庭」談などおっぱじめるような事は決してない。かく口汚く罵るものの先生は何も新しい女権主義フエミニズムを根本から否定しているためではない。婦人参政権の問題なぞもむしろ当然の事としている位である。しかし人間は総じて男女の別なく、いかほど正しい当然な事でも、それをば正当なりと自分からは主張せずに出しやばらずに、何処までも遠慮深くおとなしくしている方がかえって奥床おくゆかしく美しくはあるまいか。現代の新婦人連は大方これに答えて、「そんなお人好ひとよしな態度を取っていたなら増々ますます権利を蹂躪じゆうりんされて、遂には浮瀨うかみせがなくなる。」というかも知れぬ。もし浮瀨なく、強い者のために沈められ、滅ほろぼされてしまうものであったならば、それはいわゆる月に村雲むらくも、花に嵐ふぜいの風情。弱きを滅す強き者の下賤げせんにして無礼野蛮なる事を証明すると共に、滅される弱き者のいかほど上品で美麗であるかを証明するのみである。自己を下賤醜悪にしてまで存在を続けて行く必要が何処にあらう。潔いさぎよく落花の雪となつて消るに如しくはない。何に限らず正当なる権利を正当なりなどと主張する如きは聞いた風な屁理窟へりくつを楯たてにするようで、実に三百代さんびやくだい言的げんてき、新聞屋的、田舎議員的ではないか。それよりか、身に覚えなき罪科つみとがも何の明しの立てようなく哀れ刑場の露と消え……なんテいう方が、何となく東洋的な固有の残忍非道な思いをさせてかえつて痛快ではないか。青山原宿あ

たりの見掛けばかり門構えの立派な貸家の二階で、勸工場かんこうばしき式の椅子テーブルの小道具よろしく、女子大学出身の細君が鼠色になったパクパクな足袋たびをはいて、夫の不品行を責め罵るなどはちよつと輸入的ノラらしくて面白いかも知れぬが、しかし見た処の外観からして如何にも真底しんそこからノラらしい深みと強みを見せようというには、やはり髪かみの毛けを黄くきいろ眼を青くして、成ろう事なら言葉も英語か独逸語ドイツごでやった方がなお一層よさそうに思われる。そもそも日本の女の女らしい美点——歩行に不便なる長い絹の衣服きものと、薄暗い紙張りの家屋と、母音ぼいんの多い緩慢な言語と、それら凡てすべに調和して動かすことの出来ない日本的女性の美は、動的ならずして静止的でなければならぬ。争ったり主張したりするのではなくて苦しんだり悩んだりする哀れ果敢はかない処にある。いかほど悲しい事辛い事があつても、それをば決して彼のサラ・ベルナルの長台詞ながざいふのようには弁じ立てず、薄暗い行燈あんどうのかげに「今頃は半七はんしちさん」の節廻しそのまま、身をねじらして黙つて鬱ふさぎ込むところにある。昔からいい古した通り海棠かいどうの雨に悩み柳の糸の風にもまれる風情ふぜいは、単に日本の女性美を説明するのみではあるまい。日本という庭園的の国土に生ずる秩序なき、淡泊なる、可憐なる、疲労せる生活及び思想の、弱く果敢き凡ての詩趣を説明するものであらう。

八

然り、多年の厳しい制度の下にわれらの生活は遂に因襲的に活気なく、貧乏臭くだらしく、頼りなく、間の抜けたものになったのである。その堪えがたき裏淋しさと退屈さをまぎらすせめてもの手段は、不可能なる反抗でもなく、憤怒怨嗟でもなく、ぐつとさばけて、諦めてしまつて、そしてその平々凡々極まる無味単調なる生活のちよつとした処に、ちよつとした可笑味面白味を発見して、これを頓智的な極めて軽い芸術にして嘲つたり笑つたりして戯れ遊ぶ事である。桜さく三味線の国は同じ専制国でありながら支那や土耳其のように金と力がない故万代不易の宏大なる建築も出来ず、荒涼たる沙漠や原野がないために、孔子、釈迦、基督などの考え出したような宗教も哲学もなく、また同じ暖い海はありながらどういふ訳か希臘のような芸術も作らずにしまった。よし一つや二つ何か立派などつしりした物があつたにしても、古今に通じて世界第一無類飛切りとして誇るには足りないような気がする。然らば何をか最も無類飛切りとしようか。貧乏臭い間の抜けた生活のちよつとした処に可笑味面白味を見出して戯れ遊ぶ俳句、川柳、端唄、小唄の如き種類の文学より外には求めても求められまい。論より証拠、先ず試みに『詩経』を繙

いても、『唐詩選』、『三体詩』を開いても、わが俳句にある如き雨漏りの天井、破れ障子、人馬鳥獸の糞、便所、台所などに、純芸術的な興味を托した作品は容易に見出されない。希臘羅馬以降泰西の文学は如何ほど熾であつたにしても、いまだ一人として我が俳諧師其角、一茶の如くに、放屁や小便や野糞までも詩化するほどの大胆を敢てするものはなかつたようである。日常の会話にも下がかつた事を軽い可笑味として取扱ひ得るのは日本文明固有の特徴といわなければならない。この特徴を形造つた大天才は、やはり凡ての日本的固有の文明を創造した蟄居の「江戸人」である事は今更茲に論ずるまでもない。もし以上の如き珍々先生の所論に対して不同意な人があるならば、請う試みに、旧習に従つた極めて平凡なる日本人の住家について、先ずその便所なるものが縁側と座敷の障子、庭などと相俟つて、如何なる審美的価値を有しているかを觀察せよ。母家から別れたその小さな低い鱗茸の屋根といい、竹格子の窓といい、入口の杉戸といい、殊に手を洗う縁先の水鉢、柄杓、その傍には極つて葉蘭や石菖などを下草にして、南天や紅梅の如き庭木が目隠しの柴垣を後にして立つてゐる有様、春の朝には鶯がこの手水鉢の水を飲みに柄杓の柄にとまる。夏の夕には縁の下から大な臺が湿つた青苔の上にその腹を引摺りながら歩き出る。家の主人が石菖や金魚の水鉢を縁側に置いて楽し

むのも大抵はこの手水鉢の近くである。宿の妻が虫籠や風鈴ふうりんを吊すのもやはり便所の戸口近くである。草双紙の表紙や見返しの意匠なぞには、便所の戸と掛手拭かけてぬぐいと手水鉢とが如何に多く使用されているか分らない。かくの如く都会における家庭の幽雅なる方面、町ま中ちなかの住いの詩的情趣を、専ら便所とその周囲の情景に仰いだのは実際日本ばかりである。西洋の家庭には何処に便所があるか決して分らぬようにしてある。習慣と道德とを無視する如何に狂激なる仏蘭西フランスの画家といえども、まだ便所の詩趣を主題にしたものはないようである。そこへ行くと、江戸の浮世絵師は便所と女とを配合して、巧みなる冒險に成功しているのではないか。細帯しどけなき寝衣姿ねまきすがたの女が、懷紙かいしを口に銜くわえて、例の艶なまめかしい立膝たてひざながらに手水鉢の柄杓から水を汲んで手先を洗っていると、その傍そばに置いた寢屋ねやの雪洞ぼんぼりの光は、この流派の常つねとして極端に陰影の度を誇張した区劃の中に夜の小雨よるこさめのいしめやかと蕭条しめやかに海棠かいとうの花弁はなびらを散す小庭の風情ふせいを見せている等は、誰でも知っている、誰でも喜ぶ、誰でも誘いざなわれずにはいられぬ微妙な無声の詩ではないか。敢えて絵空事えそらごとなどと言う勿なれ。とかくに芝居を芝居、画えを画とのみして、それらの芸術的情趣は非常な奢侈しゃし贅ぜいたく沢あちに非ざれば決して日常生活中には味われぬもののように独断している人たちは、容易しゆこうに首肯しゅこんしないかも知れないが、便所によつて下町風な女姿が一層の嬌きようえん艶えんを添え得

る事は、何も豊国とよくにや国貞くにさだの錦絵にしきえばかりには限らない。虚言うそと思うなら目にも三坪の
佗住居わびずまい。珍々先生は現にその妾宅わがやにおいてそのお妾によって、実地に安上りにこれを味
つてござるのである。

九

今の世は唯たださえ文学美術をその弊害からのみ觀察して宛さながら十惡七罪の一ツの如く厭いとい恐
れている時、ここに日常の生活に芸術味を加えて生存の樂しさを深くせよといわば、それ
こそ世を害し国を危くするものと老人連はびつくりするであらう。尤もつとも国民的な大芸術
を興おこすには個人も国家もそれ相当に金と力と時間の犠牲を払わなければならぬ。万が一し
くじった場合には損害ばかりが残つて危険かも知れぬ。日本のような貧乏な国ではいかに
思想上価値があるからとてもしワグナーの如き樂劇一曲をやや完全に演ぜんなぞと思立おもひた
たば米や塩にまで重税を課して人民どもに塗炭とたんの苦しみをさせねばならぬような事が起る
かも知れぬ。しかしそれはまずそれとして何もそんなに心配せずとも或種類の芸術に至つ
ては決して二宮尊徳にのみやそんとくの教と牴觸ていしょくしないで済むものが許多いくばくもある。日本の御老人連

は英吉利イギリスの事とさえいえば何でもすぐに安心して喜ぶから丁度よい。健全なるジョン・ラ
 スキンが理想の流れを汲んだ近世裝飾美術の改革者ウィリアム・モオリスという英吉利人
 の事を言おう。モオリスは現代の裝飾及工芸美術およびの墮落に対して常に、趣味 [Gout] と
 贅沢 Luxe とを混同し、また美 [Beauté] と富貴 Richesse とを同一視せざらん事を説き、
 趣味を以て贅沢に代えよと叫んでいる。モオリスはその主義として芸術の専門的偏狹を憎
 みあくまでその一般的鑑賞と実用とを欲したために、時にはかえつて極端過激なる議論を
 しているが、しかしその言う処は敢て英国のみならず、殊にわが日本の社会なぞに対して
 はこの上もない教訓として聴かれべきものが尠すくなくない。一例を挙げれば、現代一般の芸術
 に趣味なき点は金持も貧乏人もつまりは同じであるという事から、モオリスは世のいわゆ
 る高尚優美なる紳士にして伊太利亜イタリヤ、埃及エジプト等を旅行して古代の文明に対する造詣ぞうけい深く、
 古美術の話とさえいえば人に劣らぬ熱心家でありながら、平然として何の気にする処もな
 く、請負普請うけおいづしんの醜劣俗悪な居室きよしつの中に住んでいる人があると慨嘆している。これは知
 識ある階級の人すら家具及び家内裝飾等の日常芸術に対して、一向に無頓着である事を痛つ
 罵うばしたものである。わが日本の社会においてもまた同様。書画骨董と称する古美術品の優
 秀清雅と、それを愛好するとか称する現代紳士富豪の思想及生活とを比較すれば、誰れか

唾然^{あげん}たらざるを得んや。しかし茲^{ここ}に更に一層唾然^{あげん}たらざるを得ざるは新しき芸術新しき文学^とを唱^{とな}うる若き近世人^{たち}の立居振舞^{いふるまい}であろう。彼らは口に伊太利亜復興期^{イタリヤ}の美術を論じ、仏国近世の抒情詩を云々^{うんぬん}して、芸術即ち生活、生活即ち美とまでいい倣^なしながらその言行の一致せざる事むしろ憐むべきものがある。看^みよ。彼らは己れの容貌と体格とに調和すべき日常の衣服の品質^し縞^{しま}柄^{がら}さえ、満足には撰択し得ないではないか。或者は代言^{だいげん}人の玄関番の如く、或者は齒医者^{おちぶれ}の零落^{おちぶれ}の如く、或者は非番巡查の如く、また或者は浪花^{なわが}節^し語りの如く、壮士役者の馬の足の如く、その外見は千差万様なれども、その禪^{ふん}の汚^じさ加減はいずれもさぞやと察せられるものばかりである。彼らはまた己れが思想の伴侶たるべき机上の文房具に対しても何らの興味も愛好心もなく、卑俗の商人が売捌^{うりさば}く非美術的の意匠を以て、更に意とする処がない。彼らは単に己れの居室を不潔乱雑^{あが}にしている位ならまだしもの事である。公衆のために設けられたる料理屋の座敷^{あが}に上つては、掛物と称する絵画と置物と称する彫刻品を置いた床^{とこ}の間に、泥だらけの外套^{がいとう}を投げ出し、掃き清めたる小庭に巻煙草の吸殻を捨て、畳の上に焼^こけ焦^がしをなし、火鉢の灰に啖^{たん}を吐くなど、一挙一動いささかも居室、家具、食器、庭園等の美術に対して、尊敬の意も愛惜の念も何にもない。軍人^{どかた}か土方^{どかた}の親方ならばそれでも差^さ支^しはなからうが、いやしくも美と調和を

口にする画家文士にして、かくの如き粗暴なる生活をなしつつ、毫も己れの芸術的良心に恥^{はづ}る事なきは、実にや怪しともまた怪しき限りである。さればこれらの心なき芸術家によりて新に興^きさるる新しき文学、新しき劇、新しき絵画、新しき音楽が如何にも皮相的にして精神気魄^{きはく}に乏しきはむしろ当然の話である。当節の文学雑誌の紙質の粗悪に植^{しよく}字の誤り多く、体裁の卑俗な事も、単に経済的事情のためとのみはいわれまい……。

閑話休題^{あだしごとはおきつ}。妾宅の台所にてはお妾が心づくしの手料理白魚の雲丹焼が出来上り、それからお取り膳^{ぜん}の差しつ押えつ、まことにお浦山吹^{うらやまぶ}きの一場^{いちじょう}は、次の巻^{まき}の出づるを待ち給えといいたいところであるが、故あつてこの後^{あと}は書かず。読者^{りよう}諒せよ。

明治四十五年四月

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〇五」岩波書店

1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年4月15日作成

2010年11月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

妾宅

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>